



的、相互作用的、複合的」な「人とことばと社会」の関係についての事例研究だということである。また、ほぼすべての論考が、まとまった時間をとって、一人ひとりにインタビューするという調査方法を採用している。対象人数は1~4名で、少数の人物にゆっくりと話を聞くことで、人々の移動の経験と言語やアイデンティティに対する認識のあり方をリアルに捉えようとする。

こうした共通点はあるのだが、各論考に抱く印象はかなり異なっている。「動的、相互作用的、複合的」な「人とことばと社会」の関係をリアルに捉えようとする場合、何らかの人物や場を選び出し、調査対象として定める必要が出てくる。そこに論考ごとの特徴が現れる。本稿では、調査対象の定め方によって11本の論考を整理し紹介していく。

### 3. 特定の組織・属性集団を対象とするもの

#### 3.1 特定の組織・属性集団の調査研究に基づく結論

「人とことばと社会」の関係が「動的、相互作用的、複合的」であるとするならば、移動する人々それぞれの経験や認識、それを取り囲む時代的・社会的・個人的な環境も異なっている。一人の人物を通して瞬間瞬間で変わりうるものであり、個人によってまた個人の中でも変わっていくはずだ。この意味では、特定の組織・属性集団を対象とする研究は、目的にそぐわないと思われるかもしれない。そのためか、明らかにこのタイプと分類された論考は、第4章の本間論文と第10章の山下論文のみであった。

まず本間論文は、本書で唯一、移動する者を直接の調査対象としていない論考である。データには児童の作文も含まれているが、シンガポールの日本人学校の佐倉先生へのインタビュー調査が主な分析対象となっている。シンガポールの日本人学校では、日本から／日本へと限らず、転入・転出が非常に多い。そうした状況において、佐倉先生は、子どもたちが人とつながりや絆を実感し、安心して成長していくためには、「自分の生活を語る力」(p. 95)を獲得することが必要だと考えた。そして、作文や社会科の授業を設計・実践し、子どもたちはお互いの経験や思いを知り合うこと、他者の立場に立って考える力を得ることができた。

この本間論文は、シンガポールの日本人学校の特定の授業を研究対象としている。しかしながら、現在の海外日本人学校に広く共通する問題—在籍期間途中での移動者が非常に多い—に対し、一つの解決策を示す事例研究になっている。

次の山下論文は、「人とことばと社会」の関係を記そうとした点では次節3.2以降の論考と共通しているが、移動を続けるパキスタン人ムスリム女性を主たる対象と定め、その移動の世界を描き出すことを明確な目標としている点に違いがある。この目標設定のため、論考では、在日パキスタン人の概要、パキスタン人の言語レパートリー、在日パキスタン人としての社会文化的実践といった、調査対象者(山下の表現では「調査参加者」(p. 227など))を取り巻く文脈の説明に紙幅が費やされている。

エスノグラフィーの調査・分析方法を用いている点にも特徴がある。山下の方法論的立場は、移動する人々と、ことばやアイデンティティとのかかわりに迫るには、当事者の認識だけでなく、実際の言語使用や社会文化的実践を調査する必要があり、また当事者の認

識も、インタビュー調査のみでは把握できないというものである。

結果の詳細は省略するが、山下は Shanzay、Rana、Ayesha、Fiza という 4 名を主な調査対象者とし、一人ひとり経験や価値観は異なるものの、それぞれに親世代が始めた伝統的な実践に参加し、その価値観・意味世界とかかわりつつ、親世代とは異なる言語レパートリーを用いていること、日本語や英語といった主流派の言語も、「パキスタン人ディアスポラ・コミュニティに所属する、越境的なパキスタン人として自己と他者や社会との関わりを構築する資源として用いられていた」(p. 243) ことを結論として導き出した。

### 3.2 特定の組織・属性集団の調査研究から出てきた知見

3.1 と同じように、特定の属性集団の調査研究のように読めるが、論考筆者がそれを自覚的に目標としていたかに曖昧さが残る論考もあった。

第 6 章の三宅論文は、1960 年代にイギリスに移住し国際結婚をした愛子と、その娘である Saki にインタビュー調査を行い、それぞれのライフストーリーを、「日本、日本語の意味、自らの位置付けが、社会の変化とともに行われる「移動」と「選択」の中で、どのように変化してきたか」(p. 126) という観点で描き出した。

調査対象者をヨーロッパ移民の 1 世・2 世の代表事例として取り上げ、記述している部分も多い。愛子については、国際結婚や移民がまったく一般的でなかった時代に、日本人の少なかったヨーロッパに移住し国際結婚した者として、また Saki については、そうした母親の元で育った子どもとして捉えている。結論の一つとして、「移動」する家庭に育った子どもは、大人になってから「移動」を選択しやすいという可能性も指摘しており、移民 2 世という属性集団の研究につながる知見も述べている。ただし、日系ヨーロッパ移民の 1 世・2 世の研究としては事例が各一人と非常に限られており、移動しやすい 2 世という傾向も結果的に見出されたものとして記述されている (p. 146)。

また、第 9 章の大塚・岩崎論文では、「生まれながらにして聴者の世界とろう者の世界を「移動」し続ける宿命にあるろう者にとっての「移動」という経験はどのようなものか」(p. 194) を探るため、トリニダード・トバゴ出身のろう者で、日本に移住したシンディさんにインタビューを行った。そして得られた知見として、国境を越えて移動した人々にとっては、その越境がアイデンティティに大きく影響するが、ろう者にとっては、聴者のコミュニティとろう者のコミュニティの間の文化差が大きく、その移動の影響がより強いとした。

ただし、大塚・岩崎自身は論文の最終的なまとめの一つとして、国境以上の大きな隔たりを超える移動の存在可能性と、「人とことばと社会」をより広い視野で捉える視点の提供という、普遍的な提案を行っており (p. 211)、この提案に重きを置いているようにも読み取れた。また、今回の結果は、調査者と被調査者の間に手話という共通言語があったとはいえ、ろう者がろう者でないものに向かって行った語りのみに基づいて出されていた。ろう者がろう者にインタビューをしていたら、国境を超える移動こそを大きな移動として語った可能性があり、ろう者の移動経験や認識を一つの世界として十分に理解することをめざすとすれば、調査方法に工夫が必要だろう。

#### 4. 個人を対象とするもの

そのほかの本書の論考は、特定の組織や属性集団を全面には出さず、人それぞれの経験や認識を個別的に捉えるというスタンスを採っている。移動する個々人は、国境を越えるといった空間的な移動だけでなく、多様な言語や言語教育の間を移動する存在で（川上、p. 250）、移動の経験も、その動機や思いも異なっている。それが移動経験と認識のリアルなありようだろう。こうした前提で各人にインタビューをし、「移動とことば」の経験と認識を記述していくと、自ずと「動的、相互作用的、複合的」な姿が見えてくる。

第1章の岩崎論文からは、日本人とイギリス人の「ハーフ」と自称するハナさんの、留学前・中・直後・後の言語とアイデンティティの変容の姿が、言語ポートレートという一種のイラストから浮かび上がってくる。第2章の倉田論文からは、オーストラリアで継承日本語を学ぶ、りか、ローレン、ミアが、「なるべき自分」と「なりたい自分」の間で、各人の動機・目的をもって日本語学習を意味づけてきたことがわかる。第3章の山内論文からは、日仏国際家族を背景にもち、大学で日本語を専攻したサラが、家族や友人との関係の中で、日本語に限らない学びを得ていったプロセスが伝わってくる。第5章の人見・上原論文では、フィリピンにつながるAさんと中国につながるGさんとが、自分の言語的資源や能力を認識しながら日本でキャリアを作っていた様子を読み取れる。第7章の上田論文は、中国残留孤児1世の佐藤フミ子、2世の佳子、3世の静子、4世の恵について、各世代の時代背景や言語との関係を含みつつ、日本に来るまでと日本に来てからの暮らし全体を書きとどめている。第8章の八木論文からは、移住者であるスウさん、リタさん、メイさんが、来日前の経験と現在をつなげ、自ら日本語を学び使いながら生活を築いてきた過程がよくわかる。第11章の川上論文では、同年齢で母親が日本人という点で共通するが、タイとドイツという生まれた場所が異なるBさんとシュミット誠さんが、どのような空間、言語、言語教育間の移動を続けてきたかが、生い立ちまでさかのぼり記されている。

これらの最終的な結論は、「人とことばと社会」の関係を「動的、相互作用的、複合的」、また個別的に捉えることの重要性を述べるものと総括できる。より具体的にいうと、(1)「人とことばと社会」の関係が「動的、相互作用的、複合的」であるということ、分析結果として改めて述べる（倉田、山内、八木、川上）、(2) (1)のような理解の仕方に基づいた教育・支援の必要性を述べる（倉田、山内、人見・上原、八木）、(3) (1)のような理解の仕方に基づいた研究の必要性を述べる（岩崎、八木、川上）、(4) (1)のような理解の仕方に基づいて、日本の多文化共生の実現を提案する（上田、八木）、の4タイプの結論である。

これらの結論はデータから帰納されたもので説得的だったが、データと結論が合っていないと思われる論考もあった。たとえば、日本への移住者3名の日本語の生活を、3つの観点を以て描出した八木論文は、一般化や予想可能性をめざさないという方法論を採っており、最終的な結論も日本語教育関係者への広い呼びかけとなっている（p. 187）。しかし私が3名の語りを読み直すと、「教育機関に通う機会や意志のない移住者が、自主的に日本語使用や学習に取り組み、日本社会での居場所を見つけるためには何が必要か」という問いに答える内容をもっていると思われた。ただ、これを研究目的とするならば、調査や記述の仕方を再設定しなければならず、論文著者の意図にはそぐわないかもしれない。

## 5. 「人とことばと社会」の事例研究とは何の事例研究なのか

「動態的、相互作用性的、複合的」な「人とことばと社会」の関係の記述をめざすとすれば、ある意味で調査の対象は誰でもよい。人類はすべて、何らかの言語レパトリー間を移動する者であり、それぞれの経験や認識は必ず異なるはずだからだ。問題は、理論上ではそうした個々人の異なりが理解できるにもかかわらず、実際の生活の中では特定の属性集団を異なるものとして一面化し、継承語を押し付けるなどしてしまいやすいという傾向である。個人の人生の跡付けを研究の目的とすると、その代替不可能性と唯一性を伝えることはできる。ただ、描き出されたものは何の事例とも言えない（あえて言えば全人類の事例）ために、読み手側は、過剰に個別性的にか過剰に一般的にしか理解できないのではないか。

その意味で、第10章の山下論文は、対象を在日パキスタン人ムスリム女性という特定のカテゴリーに限定したにもかかわらず、外国につながる子どもたちの継承についての、従来の価値観・世界観全体を説得的に反証する事例となっている。むしろ、南アジア出身のムスリム女性といった、特に偏見をもって一面化されやすい属性集団を取り上げたこと、そしてその世界のリアリティーを捉えるために、言説レベルだけでなく実践レベルも見るという方法を採用したことによって、その中に属する個々人の異なりを浮かび上がらせるとともに、移動する全世界の人々に共通する継承という課題への問題提起が可能になった。

昨年「日本語教育論」という授業で、クラスメート同士でことばとの出会いと思いを聞き合い、レポート化する実践を行った（レポートの一部は<http://segawa.matrix.jp/>にて公開）。本書がテーマとしている「人とことばと社会」の関係の記述は、言語教育の教員養成では有効だろう。言語教育の設計においては、ことばに対し誰もが別個の経験や思いをもち、それも変わりうるものであることを認識したうえで、この学習者にここで行うべき実践とは何かを考えていく必要があるからだ。それは本書の倉田、山内、人見・上原、八木も指摘している。

しかし研究論文としては、帰納的な調査・分析方法を使ったとしても、それによる発見を研究目的として再設定し、論証すべきではないか。つまり、具体的な問題を解決するか、特定の仮説を検証するものとしての表現を私は求めている。

あるいは、目的として先に明示せずとも、記述そのものが問題解決・仮説検証になっていくような表現の方法もあるだろう。それが成功するのは、筆者自身の中で問いと答えを十分に組み立てたうえで、それを伝える有効な方法として特定事例の詳細な記述を採用した場合である。安丸良夫の『出口なお』（1977、朝日新聞社）は、これを実現した稀有な例だ。一人の人間が、狂気ともとられる状態で残したテキストから、通俗道徳という近代日本の民衆意識を浮かび上がらせ、それはプロテスタンティズムの倫理、モラル・エコノミーといった世界の民衆意識の理論に連なるものだった。

本書の川上が提唱した地動説的研究は、移動が常態化する現在の、どのような問題を解決しどのような仮説を検証していくのだろうか。質的な事例研究に携わる者のひとりとして、はじまったばかりのアプローチがもたらす果実に、今後も注目を続けていきたい。

（せがわ はづき 関西学院大学総合政策学部）